

中山間地域における若者の新たな定住方法

～高知県・梼原町をモデルとして～

1190560 山内 麻由

高知工科大学 経済・マネジメント学群

1. 概要

近年、中山間地域では、若者の地域離れによる地域の衰退が問題視されている。高知県・梼原町では移住促進活動は積極的に行われているが、現住者に対しては支援を十分に行っていない現状が指摘されている。さらに、移住者の視点から見ても、既に住んでいる若年層がその地域に満足していなかったら、移住してきても出て行く可能性が高くなる。このことから、中山間地区の現住者がどのように地域に永住するかを知ることができれば、人口の流出が抑えられ、地域の衰退が抑止されると考えられる。そこで本研究では、現在梼原町に住んでいる若者を対象としたヒアリング調査と、高知県立梼原高等学校の生徒を対象としたアンケート調査の2つの調査から若者の定住に関する考えを明らかにする。その結果、「人との出会い」「愛着」「地域に対する使命感」によって定住することが明らかになった。そのため、人との交流の場を作っていくことが若者の定住に繋がると結論付けた。

2. 背景

近年、中山間地域では、若者の都会進出による人口減少が深刻化している。農林水産省によると、中山間地域とは、「山間地及びその周辺の地域、その他地勢等の地理的条件が悪く、農業生産条件が不利な地域」という定義であり、全国に1,697市町村(平成30年4月1日現在)ある。若年層が地域からいなくなると、労働生産力の低下、伝統芸能などの後継者不足、コミュニティーの維持(冠婚葬祭、日常生活)が困難になるなど地域の維持が出来なくなる。人口を増加させる方法は様々あるが、行政は「人を増やす」＝「移住」だと思いう傾向がある。そのため、移住者には手厚く補助をするが、定住者には不十分であることに不満を抱き、若者が町外に流出することが問題視されている。本研究では、移住政策の前に地元住

民の若者の地域満足度を高めることが必要だと考え、若者の「定住」に着目した。その中でも、高知県・梼原町では、「体験型モデル住宅」「空き家バンク」など移住政策に積極的に取り組んでいるが、現在梼原町に住んでいる若者に対しての定住政策に力を入れていない現状がある。その結果、梼原町の転出率は20歳前後が一番高く、年々生産年齢人口が減少している。このことから、若年層の住民が地元に対してどのような想いを持っているのかを明らかにすることで、新たな定住方法を導き出すことが可能となる。そして、現在中山間地域に住んでいる人たちにとって「住みやすい町」をつくること定住者を増やすことに繋がると期待できる。

3. 目的

本研究の目的は、高知県・梼原町を対象とし、中山間地域がどのような政策を実施すれば若者が定住しやすい環境づくりができるのかを調査し、新たな若者の定住方法を提案することである。

4. 研究方法

本研究は以下の手順で行う。

- ① 既往研究調査を行う。
- ② 現在梼原町に住んでいる20代～30代の若者を対象にヒアリング調査を実施し、梼原町の暮らしや定住意識を明らかにする。
- ③ 高知県立梼原高等学校の生徒を対象にアンケート調査を実施し、梼原町に対しての印象、定住意識を明らかにする。
- ④ 2つの調査を踏まえて、定住意向の抽出をし、新たな定住方法の提案をする。

5. 既往研究の分析

I 中山間地域における高校生の生きがい指標と定住意向からみた生活環境評価(青木秀幸ら、1999)

◎調査目的

現在中山間農村に暮らす若者を対象に、地域に対する評価を分析することで若者の志向する生活環境を明らかにすることを目的とする。

◎調査方法

島根県立飯南高等学校の生徒 157 人を対象にアンケート調査を行った。

◎調査結果

男女とも一時的に地域から出て、再び戻りたいと考えている一時転出志向者が最も多い。また、男子は定住志向者が女子に比べて高く、女子は非定住志向者が男子に比べて高い。さらに生活情報では、地域の人との会話は男女とも頻度が極端に低く、他世代との交流の機会が少ない。

II 中山間地域における移住・定住の方策を考える

～高知県梶原町を対象として～(澤菜月、2014)

◎調査目的

中山間地域における移住・定住者の実態を明らかにし、そこから定住持続要因について考察することを目的とする。

◎調査方法

高知県の取り組みについて整理し、梶原町在住の男女約 20 名に梶原町での取り組みや住環境・労働環境の面についてヒアリング調査を行った。

◎調査結果

梶原町に移住してくる方は、豊かな自然や人の温かさに魅力を感じ移住してくる人が多い。地域住民の方も移住者を迎え入れる姿勢が大事であり、移住者の方も住民の方とコミュニケーションをとることが何より重要である。

III 農山村地域に向かう若者移住の広がりを持続性に関する一考察-地域サポート人材導入策に求められる視点-

(図司直也、2013)

◎調査目的

農山村地域社会サポート人材を志す若者の応募動機と任期後の進路展開に関する実態調査から今後求められる分析視角

を明らかにすることを目的とする。

◎調査方法

山梨県小管村の地域おこし協力隊に応募した 20～30 代の 6 人に応募動機に関するヒアリング調査を行った。

◎調査結果

ヒアリング調査の分析で、応募動機から「田舎暮らし志向型」と「開発・起業志向型」に 3 人ずつ分類できた。どちらの場合も 1 年目は「地域に馴染むこと」に試行錯誤してきた。

地域おこし協力隊では、2011 年度の任期終了者 100 人のうち約 7 割が定住に結びつき、大きな成果を評されている。

IV 若者の地域に対する考え方についてのアンケート結果

(清泉女学院大学人間学部 地方の若者の声を発信するプロジェクト、2015)

◎調査目的

地方に住んでいる若者が、地方活性化に対してどのような意見を持っているのか、どのようにすれば地域が活性化すると考えているかなどについて明らかにすることを目的とする。

◎調査方法

概ね 18 歳～30 歳くらいまでの男女 194 人に、現在住んでいる地域に対する考え方、就職したい地域、地方活性化に対する意見などについて質問紙法により記入を求めた。

◎調査結果

若者は、「周りの人たちと交流したい」「相談できる場所がほしい」「子育てを助けてほしい」と思っているため、若者が孤立しないように周りの人たちとの交流が必要である。

また、地域が活性化していく上での問題点として「地域で何に取り組んでいるかわかっていない若者が多い」「若い人が仕事以外の趣味を持って集まれる場所が少ない」などといった意見が挙がった。

まとめ

地域に移住定住する上で「地域住民とのコミュニケーション」を一番大切にしなければならない。多くの若者が「地域とのつながり」を求めているが、高校生は他世代との交流が少ない。また、住んでいる地域は好きだが、住み続けたいかどうかは別であり、中山間地域に定住するには情報源の多さ、交通機関の発達、仲間がいるかどうかが重要視される。しか

し、「定住」に対しての既往研究が少なく、どのような町になれば若者が住み続けるか明確にわかっていない。そこで、本研究では、若者が地域に対する想いなどを明らかにし、どのような条件があれば定住するのかを導き出す。

6. 梶原町の定住政策

6-1 ヒアリング調査とアンケート調査の位置づけ

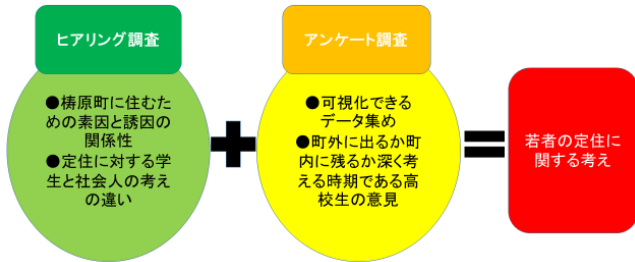


図-1 調査の位置づけ

ヒアリング調査では、現在梶原町に住んでいる20代～30代の社会人に調査を行い、学生と社会人の梶原町に対する想いや定住に対する考えを明らかにする。また、アンケート調査では、高校の全校生徒に調査を行い可視化できるデータ集めをする。さらに、進学や就職で町内に残るか、町外に出るかを真剣に考える時期である高校生の梶原町への想いや定住に関する考えを明らかにする。2つの調査により、高校生と現在定住している人の考えの違いを見出し、中山間地域にどのような政策があれば定住するのかを導き出す。

6-2 梶原町の概要

梶原町は、高知県高岡郡に属しており、高知県と愛媛県の境目にある。町面積の91%を森林が占め、日本三大カルストである標高1,455mの「四国カルスト」に抱かれた自然豊かな中山間地域である。人口は3,529人(平成31年1月末現在)、高齢化率は42.3%(平成27年)である。

高知市内までは、車で約1時間30分かかる。梶原町内から最寄り駅までは、車で1時間程度かかる山間の町である。

また、梶原町の産業割合は就業者1,846人のうち、第一次産業は511人、第二次産業は443人、第三次産業は892人(平成27年)であり、農林水産業が盛んである。第一次産業には

林業、第三次産業には土建が多い。



図-2 梶原町の位置

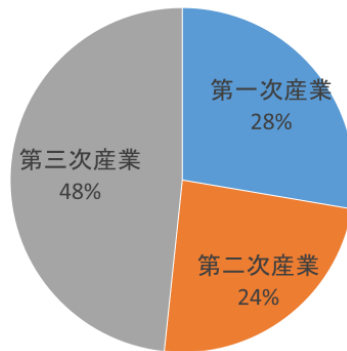


図-3 2015年の梶原町の産業割合(出典:国勢調査)

6-3 梶原町での定住の現状

国勢調査に記載されている1980年から2015年までの梶原町の人口を調べてみると、生産年齢人口が年々減少していることがわかった。2015年には、年々緩やかに増加している老年人口と生産年齢人口が変わらない人数になっている。

また、国勢調査に記載されている梶原町の年齢別転出率は、男女ともに20歳前後が一番多く、高校生のうちに定住意識を持つことが大事だとわかった。

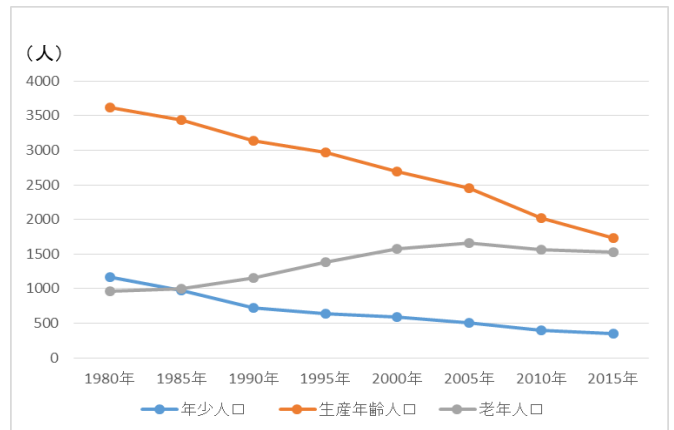


図-4 梶原町の人口推移(出典:国勢調査)

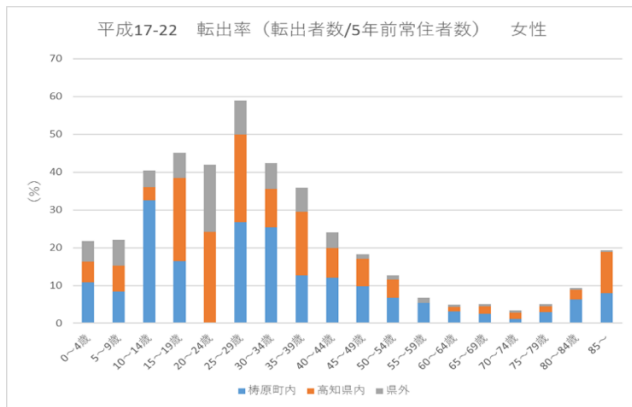


図-5 棒原町に住む女性の年齢別転出率 (出典: 国勢調査)

7. ヒアリング調査の概要

7-1 ヒアリング調査の内容

現在棒原町に住んでいる20代～30代の若者を対象に、棒原町に定住するまでのきっかけや条件、棒原町に対する想いを明らかにすることを目的とし、対面形式で1時間程度ヒアリング調査を実施した。日時は2018年9月21日、10月15日、2019年1月15日、1月16日の4日間である。

表-1 ヒアリング調査対象

氏名	年齢	性別
Aさん	20代	女
Bさん	20代	男
Cさん	20代	男
Dさん	20代	男
Eさん	30代	男
Fさん	30代	女

7-2 分析方法

ヒアリング調査時には、質問内容を記載したメモを用意し調査を行った。ヒアリング結果を①棒原町の良いところ、不足しているところ②暮らしやすさ③プライバシー④定住意思という4項目に分別した。

7-3 ヒアリング結果

① 棒原町の良いところ、不足しているところ

-Aさん (20代、女性) -

棒原町の良いところは、鈴虫の鳴き声や雪景色などといっ

た四季を身体で感じられるところである。また、補助も多く子供を育てる環境に適しており、おせっかいの人が多いため面倒を見てもらえる。

棒原町の不足しているところは、子供の遊ぶ場所が少ないところである。また市内から離れているにも関わらず交通の便が悪いことが挙げられた。

-Bさん (20代、男性) -

棒原町の良いところは、地域の人が優しいところである。初めて会った人でも会話が弾み、棒原町民の人柄に好感を持っている。

棒原町の不足しているところは、遊ぶところがないことで、学生時代は町内の川などで遊んでいた。

-Cさん (20代、男性) -

棒原町の良いところは、人が温かいところである。棒原町に住んでいて、地域の人柄が一番助かっておる。

棒原町の不足しているところは、町民が行政に頼りすぎているところである。町民が町を率先して盛り上げなければならないが、行政と町民のコミュニケーションが取れていない。

-Dさん (20代、男性) -

棒原町の良いところは人柄であり、地域の人が温かいところである。

しかしその反面、不足しているところは地域の人間同士近すぎるところである。町全体に噂が流れるので、仕事をしていて苦に思うことがある。

-Eさん (30代、男性) -

棒原町の良いところは、言葉にするのが難しい。しかし、自分自身が棒原町を嫌だと思わないところが良いところである。

不足しているところは、高齢者しかいないところである。また、良い意味でも悪い意味でもプライバシーがない。

-Fさん (30代、女性) -

棒原町の良いところは、人が温かくクセになる町である。また、自然豊かで良い環境であり、自分自身が棒原町のこといいなと思えるところが良いところだ。

棒原町の不足しているところは、批評家が多いところである。また、行政に頼りすぎているところもあり、補助金を出しすぎていると打ち切った時に人が減っていく恐れがある。

「他にも魅力があるから住む」町にしないといけない。

② 暮らしやすさ

-Aさん (20代、女性) -

学生の頃は、何もない町で暮らすのは嫌だと思っていたが、大人になるにつれてゆっくり暮らせる榑原町のほうが暮らしやすいと感じるようになった。一度町外を出たことで、改めて榑原町の方が暮らしやすいと思った。

-Bさん(20代、男性)-

町外から榑原町に引っ越してきたが、静かに暮らせて人が優しい榑原町の方が暮らしやすい。遊ぶ場所がない町であるが、車で愛媛県や高知市内に行けるので、大人になって不便だと感じたことはない。

-Cさん (20代、男性) -

榑原町と町外に住んだ経験があるが、暮らしやすさは変わらない。榑原町に比べて町外のほうが便利だが、人柄などを照らし合わせたとき榑原町も暮らしやすいと感じる。

-Dさん (20代、男性) -

町外から榑原町に引っ越してきたが、地元の人がいる町外のほうが暮らしやすいと回答した。しかし、どっちに住みたいかと問われれば榑原町であり、理由として住んでいて楽しいということが挙げられた。

-Eさん (30代、男性) -

町外に出たことがないので、榑原町のみ暮らしやすさを質問すると、暮らしやすいと回答した。自分自身が都会に憧れてなく、市内なども遊びに行くくらいがちょうど良いと感じている。

-Fさん (30代、女性) -

榑原町と町外に住んだ経験があるが、両方暮らしやすいと回答した。理由として挙げられたのが、どちらも知っている人が多いことだ。榑原町に留まる理由は、人の温かさで自分がしたい仕事であることである。

③ プライバシー

-Aさん (20代、女性) -

地域住民と仲が良い分、子供の頃は誰が好きなのか、誰と遊んでいるのかなど親に筒抜けだった。子供の時は嫌だったが、大人になってからは慣れた。

-Bさん(20代、男性)-

学生の頃は地域の人の目が気になったが、大人になってからは慣れた。しかし、社会人になって、地域の子供の噂を聞くと自分も言われていたのかと不安になる。

-Cさん (20代、男性) -

学生の時も社会人になってからも全く気にしていない。

-Dさん (20代、男性) -

町全体に噂が流れるので、仕事をしていて苦しむことが多々ある。

-Eさん (30代、男性) -

プライバシーに関しては苦しむことしかない。それでも榑原町に留まるのは楽だからである。

-Fさん (30代、女性) -

プライバシーに関して気にしていない。

④ 定住意思

-Aさん(20代、女性)-

今後も住み続けたいと考えている。榑原町の魅力は子育て環境であり、経費が安くて親に援助してもらえる榑原町で子供を育てたい。また、大人数の学校ではなく、少人数の学校でしっかり子供を見てもらいたいため榑原町に定住したいと思っている。

-Bさん(20代、男性)-

自分が榑原町に残っているから同級生たちが帰ってきやすくなっていると考えている。

-Cさん (20代、男性) -

今後も住み続けたいと考えている。榑原町で店舗を営みたい夢を持っている。観光客など初めて来たお客さんに対して優しい店舗作りを目指したいと考えている。

-Dさん (20代、男性) -

今後も住み続けたいと考えている。都会に行きたいと考えることもあるが、住んでいて楽しいと思えるので榑原町を離れようとは考えない。

-Eさん (30代、男性) -

今後も住み続けたいと考えている。30年以上住んでいるので、榑原町以上に楽に過ごせる町があるとは思えない。子供が自立するまで自分が榑原町について勉強をして、子供に榑原町の魅力を教えていきたいと思っている。

-Fさん (30代、女性) -

これから自分の生活に何が起きるか分からないから、定住するとは言い切れない。

7-4 梶原町に住むまでのプロセス

今回のヒアリング結果を梶原町に住むまでのプロセスを素因(生まれ持った条件、学生時代の出会い・学び)と誘因(学生卒業以降の出会い・学び、ポリシー)に分けて図に表した。

図-6に一例を示す。黄色の枠は素因、緑の枠は誘因を表している。また、青色は行動、灰色は行動に対しての気持ちを表している。

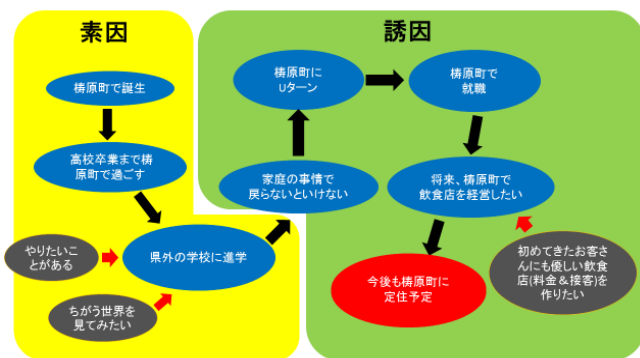


図-6 梶原町に住むまでのプロセス

7-5 考察

ヒアリング調査で明らかになった素因の共通点は、中学や高校の学生時代に、梶原町に移住するか、梶原町から一度出て行くかなど考えている事である。また、誘因の共通点は、梶原町について知るきっかけがあった事である。今回のヒアリング調査ではIターン者3名、Uターン者2名、梶原在住者1名に調査を行った。Iターン者は、梶原町の魅力を知り移住してきた事が共通しており、Uターン者は「地元を助けた」という使命感を現在抱いている事が共通している。

梶原町の「人の温かさ」が多くの人に支持されており、地域住民の仲の良さがわかる。しかしその反面、町全体に噂が流れることも多く、仕方がないことだと気にしない人と苦に思っている人の2パターンに分かれる。

また、梶原町の不足しているところを質問すると、町民が行政に頼りすぎているという回答を得た。町民と行政が一緒に町を盛り上げていくことが今後の課題である。

一度町外に出て行く人は、「広い世界を見てみたい」という

想いを抱いている。様々なきっかけによって町内に戻ってきているが、「梶原町を変えなければいけない」「地元の力になりたい」という使命感は共通している。また、町外から梶原町に引っ越してきた人は、最初は些細なきっかけにより移住するが、梶原町の「人柄」と「自然」に魅了され、居続けることがわかった。

定住意思について質問をすると、「定住予定」の人は6人中4人、「未定」の人は2人であった。梶原町に留まる理由として、「住み慣れていて楽」「地元でやりたいことがある」ことが大きな要因であり、留まらない理由としては「親しい友人が町内にいない」ことが挙げられた。

8. アンケート調査の概要

8-1 アンケート調査の内容

梶原高校の生徒113名(男子:69名、女子:44名)を対象に、梶原町に対しての想いや暮らし、定住意思について明らかにすることを目的とし、5問程度のアンケート調査を実施した。日時は2018年11月下旬である。

8-2 分析方法

記述式と選択式を取り入れた5問程度のアンケート用紙に自由に回答してもらった。梶原町の好感度、魅力的なところや問題点、地域のイベントの参加有無、梶原町に出来てほしいもの、定住意思について質問し、意見の多いものからピックアップした。

8-3 アンケート結果

① 梶原町の魅力的なところ

「梶原町の魅力的なところはどこか」という質問に対して、「自然豊か」という回答が圧倒的に多く、約80人からの意見を得た。役場や図書館などの「自然を活かした建物」という回答もあり、梶原町の自然豊かな町並みについて魅力を感じている生徒が多かった。さらに、「地域の人が優しい」といった回答も2番目に多く、多くの人が地域住民と関わりを持っていることがわかった。

② 梶原町の足りないところ、問題点

「梶原町の足りないところや問題点はどこか」という意見

に対しては、「店が少ない」「店の営業時間が短い」といった回答が多く、日常生活において不便していることがわかった。また、「プライバシーがない」という数人からの回答もあり、地域住民の関係が近いということに苦痛を感じている人もいる。

② 梶原町に出来てほしいもの、求めること

「梶原町に出来てほしいもの、求めることは何か」という問いに対して、「若者が遊べる場所」「お店(コンビニなど)」という意見が多く、高齢者向けの施設の多さに不満を感じている人が多かった。また、「自然を活かしたイベント」「観光客が集まるイベント」という梶原町独自のものを求めている回答もあった。全体的に見ると、若者は日常生活に「娯楽」と「息抜きできる場所」を求めている回答が多かった。

④ 梶原町の好感度

「梶原町についてどう思うか」の質問は、「好き」を5、「嫌い」を1で表し、当てはまる数字を選択してもらった。嫌いだという人はほぼいなかったが、好きだという人も15人以下であり、梶原町に対して好きでも嫌いでもないという回答している人が一番多かった。

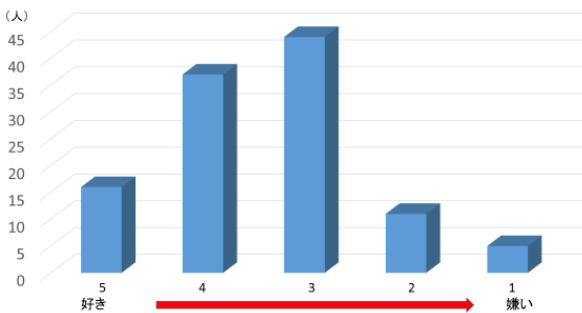


図-7 梶原町の好感度

⑤ 地域のイベントや行事の参加有無

地域のイベントや行事に参加したことがある人は約75%に値し、多くの人が地域住民と交流していることがわかった。また、どのようなイベントに参加したことがあるのか、当てはまるものを回答(複数回答可)してもらった。一番参加率が高かった行事が「町内一斉清掃」で、次に「ボランティア」「グルメ祭り&土佐牛まるかじり大会」「津野山神楽」とい

た順に参加率が高かった。

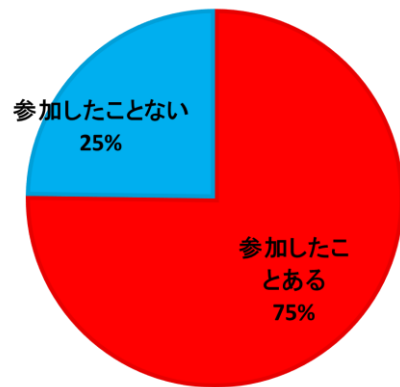


図-8 地域のイベントや行事の参加率

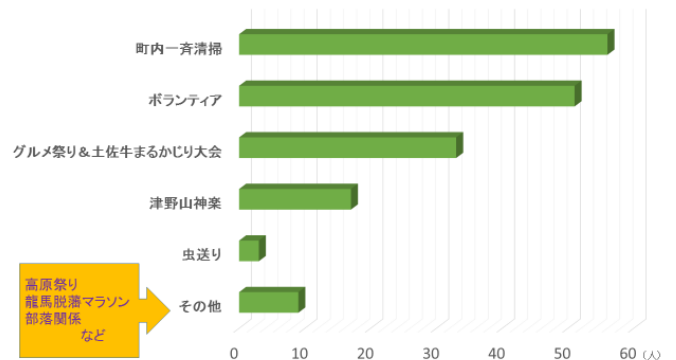


図-9 地域のイベントや行事の参加率の内訳

⑥ 定住意思

「将来地元に住みたいと思うか」という問いに対して、「住み続けたいとは思わない」が約7割に値した。「住み続けたいとは思わない」を回答した理由は、「仕事がない」「立地的に不便」「広い世界を知りたい」などが挙げられ、田舎で暮らしたくないと考えている人が多いことがわかった。しかし、そのような意見の中には、「老後に戻ってきて暮らしたい」という意見もあり、高齢になってから暮らすには住みやすいと考えている人もいることがわかった。

また、「住み続けたい」を回答した理由は、「親や友達がいる」「慣れた場所で暮らしたい」という意見が挙げられ、「知っている場所・人」が住み続けるために重要視されている。さらに、「地域に恩返しをしたい」「補助があり、子供が出来ても安心」などといった意見が挙げられた。

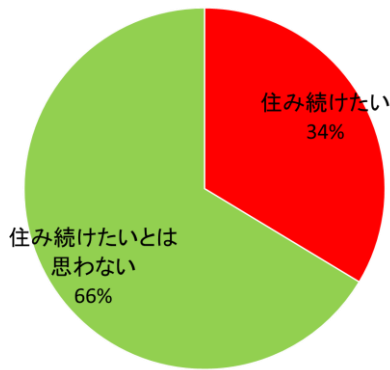


図-10 高校生の定住意思

8-4 考察

アンケート調査から、「定住する要因」と「定住しない要因」の2点を図-11に整理した。

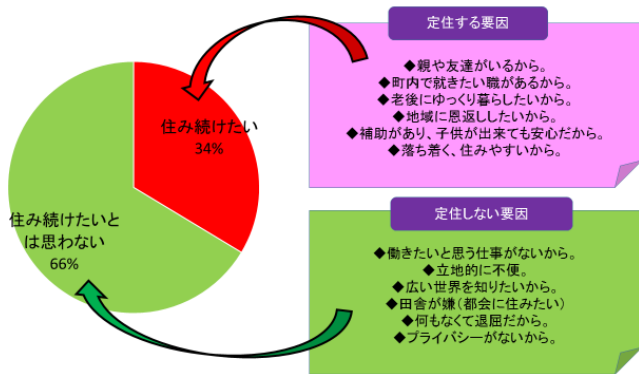


図-11 高校生の「定住する要因」と「定住しない要因」

「定住する要因」として、主に親や友人、住み慣れた地域など「知っている人、場所」が安心感を与え、住み続けたいと感じることがわかった。また、町内で就職したい、地域に恩返ししたいなど「梶原町でやりたいことがある人」「地域に使命感を持っている人」が地域に定住することが明らかになった。

「定住しない要因」は、仕事がないことや立地的に不便だと意見を挙げている人が多かった。また、「老後に帰ってきたい」と考えている人や「広い世界を知るために町外に出たい」と考えている人が定住しないことが明らかになった。梶原町の魅力的なところを「人の温かさ」と回答している人が多いが、その反面「プライバシーがない」ことを苦に思っている人がいることがヒアリング調査と共通していた。高齢化によ

り高齢者向けの施設が多く若者が楽しめない、高齢者のための施設は若者離れを促している。多くの人が若者向けの施設や遊ぶ場所、お店などを求めており、一つずつでも若者の欲しいものに応えようとする地域の在り方が必要となる。

9. 定住意思決定プロセス

図-12にヒアリング結果とアンケート結果を一般化した結果を示す。黄色の枠は素因、緑の枠は誘因を示している。また、それぞれの紫の枠は「定住しない要因」、赤の枠は「定住する要因」を表している。

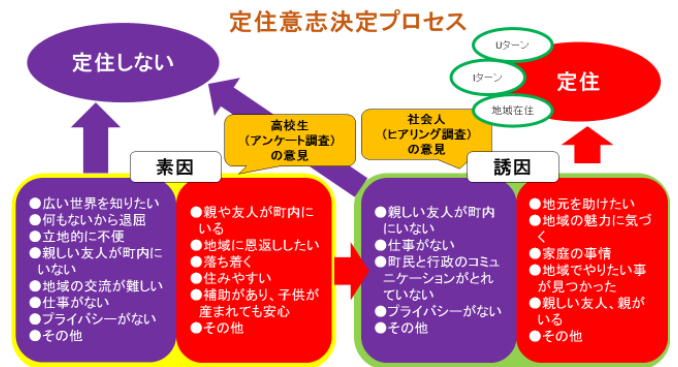


図-12 梶原町における一般化した定住意思決定プロセス

上記の図の素因は高校生(アンケート調査)の意見である。素因の紫の枠は高校生の「定住しない要因」のまとめであり、「広い世界を知りたい」「退屈」「仕事がない」「立地的に不便」「地域の交流が難しい」「親しい友人が町内にいない」「プライバシーがない」などが明らかになった。素因の赤の枠は高校生の「定住する要因」を示している。主に、「親や友人が町内にいる」「地域に恩返しをしたい」「落ち着く、住みやすい」「補助があるので子供が生まれても安心」などの意見が挙げられた。高校までの教育の時点で定住意思を決める人、社会人の誘因によって定住意思を決める人の2パターンに分かれる。

次に、上記の図の誘因は社会人(ヒアリング調査)の意見である。誘因の紫の枠は社会人の「定住しない要因」であり、高校生と同様に「親しい友人が町内にいない」「仕事がない」「プライバシーがない」ことが明らかになった。また、「町民と行政のコミュニケーションが取れていない」ことも挙げられた。誘因の赤の枠は「定住する要因」のまとめであり、「地元を助けて」「地域の魅力に気づいた」「地域でやりたいこ

とが見つかった」「親しい友人がいる」などが明らかになった。

以上のことから、学生（素因）のうちに地域のことを「よく知る」ことが定住に繋がる第一歩である。地域の魅力や問題点をよく知り、愛着や使命感が芽生え、定住に繋がると考える。さらに、若者が地域に住んでいて「楽しみ」「生きがい」を感じるように、学校以外の学生の居場所がある地域ではないといけない。本研究では、高校生の定住意思について質問をすると、「住み続けたいとは思わない」に約7割の人が回答した。生まれた地域から一度外に出て新たな出会いや価値観に出会い、それでも地元に戻ってきたいと思ってもらえる地域にならないといけない。そのために定住に大きく影響してくるのは学生以降の誘因だと考える。誘因の「定住する要因」と「定住しない要因」を比べた時に、「人との出会い」が定住意思に関わっていることが明らかになった。誘因から「定住しない」方向に進まないように、人との交流の場を積極的に作る事が大切である。そのために、仕事以外の若者の居場所をつくることや若者が地域のために実現したいと思ったことを実行できることが必要である。高齢者や移住者ばかりに手厚く援助するのではなく、地域の若者が必要だと思うことを実行していくことが若者の愛着度を芽生えさせ深めることで、定住意識を変えようとする。

10. 提案

以上から、梶原町の定住政策に次のことを提案する。

(1) 若者と行政を結ぶ窓口

ヒアリング調査で、「町民が行政に頼りすぎている」という回答を得た。地域づくりは地域住民全員で行うべきものである。行政と住民のコミュニケーションがとれていないと、地域を活性化させるのは困難である。今回2つの調査で、「地元力になりたい」「地域を変えたい」と考えている若者がいることがわかった。そのような考えを持っている若者たちのために、「若者と行政を結ぶ窓口」は必要だと考える。今後地域に何が必要であり、地域住民が暮らしやすい町にするためにはどうすべきかを若者目線で考えていくことが大事だ。また、2つの調査からプライバシーがないことで苦に感じている人が少なくないことがわかった。ストレスを少しでも軽減させるために、町外の人に定期的に地域に来てもらい、無料

相談窓口を設けることを提案する。学校や会社の人、地域に住んでいる人には相談できないことや話し相手が欲しいときなど、気軽に相談できいつでも若者の心に寄り添ってくれる窓口が必要である。

(2) 地域の魅力や問題点に触れる授業

今回のヒアリング調査で、「地元を助きたい」という使命感を抱くことが定住に繋がると明らかになった。上記に記した通り、年齢別転出率は男女ともに20歳前後が一番高く、高校生うちに定住意識を持つことが理想的である。そのために授業の一環として、地域のイベントに積極的に取り組むことや現在何が問題になっているか、他の地域との違いなど、地域について考える時間を設けることを提案する。それによって必ずしも定住に繋がるとは言えないが、一人でも多くの人が「地域のために働きたい」と思ってもらえるきっかけ作りが必要である。また、アンケート調査により定住意思のない人が多いことが明らかになったが、Uターンで戻ってきってもらうためにも学生時代に地域のことについて考えることは1つのきっかけになるのではないかと考える。

(3) 若者が交流できる場の提供

アンケート調査で梶原町に出来てほしいものを質問すると、コンビニなどのお店のほかに、「若者が遊べる場所」と回答した人が多かった。他にも、公園や自然を活かしたイベントなどといった回答があり、若者は日常生活に「娯楽」と「息抜きできる場」を求めているのではないかと結論付けた。そこで本研究では、定期的に「若者だけの交流の場」を提供することを提案する。例えば、カフェやフリースペースなどでイベントを開催し、町内と町外の若者に呼びかけ、興味がある人に参加してもらおう。町外の人を招き入れることで、新しい出会いや価値観に出会い、若者が自分を見直すきっかけになると推測する。また、同世代の人が地域に対してディスカッションができる機会も必要である。若者だけを集め、地域に対しての要望や不満を打ち明けることが地域への愛着心を深めることに繋がる。このように学校や会社以外で、若者が「息抜きできる場」「地域での自分を再確認できる場」を作り上げていくことが中山間地域で必要だと感じた。

11. 結論

本研究をまとめると以下の通りになる。

・梶原町の「人柄」や「自然環境」が多くの人に支持されており、定住意思決定のきっかけになる。また、梶原町への愛着心から「地元を助けたい」という使命感が生まれ定住へと繋がる事が明らかになった。

・行政が主体となって地域を盛り上げており、町民がついていけない現状がある。町民自らが町を盛り上げようとする意識がないと良い「まちづくり」が行われない。

・高齢化により高齢者向けの施設が多いが、若者は地域に「若者が遊べる場所」など学校や会社以外での娯楽や息抜きのできる場所を求めている。

・親しい友人がいないことなど「人」によって定住意思は変化してくる。また、「広い世界を知りたい」という意見も多く、一度は町外に出たいという若者が多い事が明らかになった。

以上のことから、「人との出会い」によって定住意思は変化することが明らかになった。地域に若者同士の交流の場を積極的に作る事が若者の定住に繋がる。

12. 今後の課題

本研究では、梶原に在住している町民を対象に定住意思決定プロセスを構築した。

本プロセスの精度を高めていくためには、以下の検討が求められる。

- ・現住者を対象としたヒアリングの対象者をさらに増やす。
- ・他の中山間地域の住民を加えた検討の必要性。

13. 謝辞

本研究にあたって、梶原高等学校の教員、生徒の皆様、梶原町在住の皆様方にご協力をいただいたことを心から感謝の気持ちを申し上げます。そして、本研究を進めるにあたり、指導をして頂いた馬淵泰教員に深く感謝致します。

14. 引用・参考文献

1 雲の上の町ゆすはら—高知県梶原町—(最終閲覧日:2019年2月7日)

<http://www.town.yusuhara.kochi.jp/town/>

2 日本医師会 JMAP (最終閲覧日:2019年2月7日)

<http://jmap.jp/cities/detail/city/39405>

3 農林水産省 (最終閲覧日:2019年2月7日)

http://www.maff.go.jp/j/nousin/tyusan/siharai_seido/s_about/cyusan/

4 GD Freak (最終閲覧日:2019年2月7日)

<https://jp.gdfreak.com/public/detail/jp010050000001039405/14>

5 青木秀幸ら 1999 中山間地域における高校生の生きがい指標と定住意向からみた生活環境評価

6 澤菜月 2014 中山間地域における移住・定住の方策を考える～高知県梶原町を対象として～

7 関司直也 2013 農山村地域に向かう若者移住の広がり持続性に関する一考察-地域サポート人材導入策に求められる視点-

8 清泉女学院大学人間学部 地方の若者の声を発信するプロジェクト 2015 若者の地域に対する考え方についてのアンケート結果 (最終閲覧日:2019年2月10日)

[http://www.seisen-](http://www.seisen-jc.ac.jp/common/images/information/wakamono_2.pdf)

http://www.seisen-jc.ac.jp/common/images/information/wakamono_2.pdf